

〔研究動向〕

## リクール文庫のアーカイブ出版・研究動向に見る 地域文化研究とのつながり<sup>1</sup>

山田智正

YAMADA Tomoaki

### リクール文庫 (Fonds Ricœur) の創設とアーカイブの公開状況

現代フランスの哲学者ポール・リクール (Paul Ricœur 1913–2005) の未公刊論文や草稿は、死後にいくつかのテーマごとに分類され出版された。これらは、パリのリクール文庫のアーカイブ資料に所蔵されていたものである。出版の際には、書かれた年代の時代的、文化的、思想史的状况を考慮した註や解説、編集者やリクールと近しかった者による証言が加えられた。テーマごとに出版された作品以外に、学位論文や講演原稿、入手困難な論文を掲載した個人研究や研究プロジェクトが出版されている。これらの研究活用の事例からは、リクールが教えていた機関、年代、国に関わるリクールの思索の特徴や成立事情を探ることができる。本稿では、特にリクールの思索と同時代の状況に言及した地域文化研究との接点を提示したい。

リクール文庫は 2005 年のリクールの死後に遺族からパリ・プロテスタント神学院に生前の所蔵文献が寄贈され、2010 年に同神学院内の図書館 3 階に設立された<sup>2</sup>。当時パリ・

- 
1. 本研究の一部はこれまでの成果であるリクールアーカイブを利用した研究と地域研究との関わりという視点から一部改稿し、現在のリクール文庫の状況に鑑み練り上げたものである。以下の成果を参照。山田智正、「ラシュリエ・ラニョー」、「リクールの未刊行草稿」、『リクール読本』編集：鹿島 徹、越門 勝彦、川口 茂雄、法政大学出版局、2016、p. 336–337、p. 377–37、「死の想像物を〈振り払うこと〉 - ポール・リクール遺稿集『死まで生き生きと』から -」、『死生学年報 2021 臨床死生学の意義』、東洋英和女学院大学 死生学研究所編、リトン、2021、pp. 93–110、ここでは p. 93 参照。地域研究との関連では以下の博士論文でより詳しく指摘した。Tomoaki Yamada, *Variations sur l'agnosticisme philosophique chez Paul Ricœur : une lecture de l'œuvre posthume "Vivant jusqu'à la mort"*, Thèse de doctorat, EHESS-Paris, 2022.
  2. 2010 年以前は、パリ・プロテスタント神学院の大規模改修工事の前であり、図書館一階の部屋に収蔵されていた。2006 年 9 月からパリ留学の際、同時期に滞在していた久米博先生、久米あつみ

プロテスタント神学院教授で、リクールと少年期より親交がありナンテール大学時代の教え子であったオリヴィエ・アベル (Olivier Abel)、リクール家と親交のあったカトリヌ・ゴールデンシュタイン (Catherine Goldenstein) らが尽力した<sup>3</sup>。リクールの著作と各国語の翻訳、著作執筆の際に参照した二次文献や所蔵文献、寄贈本など約一万二千冊が配架された。著作の元になった講演・講義原稿や論文、未公刊草稿、手紙が年代ごとに分類され、アーカイブ資料として体系的に閲覧できるようになった。

これらのアーカイブ資料でオンライン上閲覧可能なものは、①大学でのセミナーや講義ノート、読書ノート、発表等に関わるものである。その他には、②公刊された著作原稿に関するもの、③研究活動以外の社会参加などに関する講演、名誉博士号や学術賞受賞時のスピーチやインタビューなどを雑誌、機関、国ごとにまとめたものである。②と③は今のところ現地で閲覧のみ可能である。①は主に、1930年のレンヌの高校時代の授業ノートからサン・ブリウヤコルマルなどで高校教師時代をしていた1940年までの黎明期、1940年の第二次大戦の捕虜士官時代に収容所内で行った講義から終戦直後に赴任し、『意志的なものと非意志的なもの』を上辞したシャンボン・シュル・リニョンの中等教育学校時代の1948年までの期間、1949年から1955年までのストラスブルグ大時代の期間、1956年から1970年までのソルボンヌ大、ナンテール大時代の期間、1970年から1992年までのルーヴァン大、シカゴ大、ナンテール大の最後期の期間、そして1992年から2005年に没するまでの「都市の中の哲学者」の期間である。②は1947年の『カール・ヤスパースと実存の哲学』から2005年の遺稿集『死まで生き生きと』まで著作ごとに分類されている。③についてはナンテール大文学部長時代の大学改革関連のもの、プロテスタント教会での講演、京都賞での講演などがある。その他には、リクールと関わりのあった研究者やその家族、各国の出版社との手続き上の手紙などである。およそ三千通以上あり、閲覧は可能であるが、一部プライバシーに関わる内容も含まれており、目録の公開が難しい。

---

先生にオリヴィエ・アベル氏の研究室で引き合わせて頂いた。当時よりリクール文庫の設立構想で多忙を極めていたのを筆者は記憶している。リクール文庫のサイトは以下を参照。Fonds Ricœur: <https://fondsricoeur.ehess.fr/le-fonds-ricoeur-0> (2024年6月30日参照) 現在はパリ社会科学高等研究院のCRAL (芸術・言語研究センター) と提携し、以前よりも容易にアクセスできるようになった。

3. オリヴィエ・アベルの父ジャン・アベル (Jean Abel) が改革派の牧師であり、パリ郊外のロバンソン市に派遣されてきたことがオリヴィエ・アベルと当時ミュール・ブラン (白い塀) に住んでいたリクールとのつながりである。アベルの回想は以下を参照、Olivier Abel, « Mai 68, une traversée subjective : Aperçus d'un lycéen proche de Paul Ricœur en 68 », *Évangile et liberté*, 21 juin 2018(<https://archive.wikiwix.com/cache/index2.php?url=https%3A%2F%2Fwww.evangelie-et-liberte.net%2F2018%2F06%2Fmai-68-une-traversee-subjective%2F#federation=archive.wikiwix.com&tab=url>, 2024年6月30日閲覧)。

この他にリクール文庫のサイトからは、パリ科学・人文学大学 (Université PSL (Paris Sciences et Lettres)) と共同で行なったリクールのデジタル・アーカイブ・プロジェクトの成果を閲覧することができる<sup>4</sup>。ストラスブール大のダニエル・フレイ (Daniel Frey) が中心となり、世界中の様々な国の若手研究者が、著作以外の入手困難な論文を編纂し、解題を付与したものである。これらのリクールの論文は、著作のための準備考察で、補助的なものである。そのため、生前に出版されリクール自身が推敲し、出版を許可した主要著作とは異なる。デジタル・アーカイブ・リクールプロジェクトの目的は、当時の議論を通して、様々なリクールの思索の方向性を探るための導入である<sup>5</sup>。また、リクールのフランス語の原典著作や他言語での翻訳著作や主要な論文の中からキーワードを検索できるデジタル・リクールプロジェクトもアメリカのリクール学会関係者により立ち上げられた<sup>6</sup>。英語、フランス語以外にドイツ語とスペイン語の翻訳箇所にも対応している。

## 没後のアーカイブ出版・研究動向

リクールの没後のアーカイブ出版は、リクール文庫とアーカイブ編集・審査委員会が主導になって進められた。代表的なものを以下に四つ挙げるができる。①没後すぐに編纂・出版された未公刊草稿の遺稿集『死まで生き生きと』(以下『遺稿集』)<sup>7</sup>。この遺稿集は前半部と後半部の断片集に分かれる。前半部は1995年から97年頃にかけて書かれ、途中で中断されたものである。死後にリクールの秘書であったカトリーヌ・ゴルデンシュタインによって発見された。後半部は「断章」と題され、自身の死の直前までの2004年から2005年までに書かれた絶筆である。前後半部を編纂し、オリヴィエ・アベルとゴルデンシュタインが解説をつけた。②これまで雑誌などに掲載された論文、もしくは翻訳された講演の原稿など、フランス語では未公刊のものに註や解説を加え、心理学、解釈学、哲学的人間学、政治・経済・社会、宗教などのテーマごとに編纂した『論

---

4. Fonds Paul Ricoeur, publications choisies et archives numériques: <https://bibnum.explore.psl.eu/s/psl/ark:/18469/292sw> (2024年6月30日閲覧)

5. Daniel Frey, « (Re)lire Ricoeur à l'heure de l'édition numérique » : <https://bibnum.explore.psl.eu/s/psl/ark:/18469/292sw> (2024年6月30日閲覧)

6. Digital Ricoeur: <https://www.digitalricoeurportal.org/digital-ricoeur/> (2024年6月30日閲覧). Digital Ricoeurの趣旨については以下を参照, George H. Taylor et Fernando Nascimento, « Digital Ricoeur », *Études Ricœuriennes / Ricoeur Studies*, Vol 7, N° 2, 2016, p. 124-145.

7. Paul Ricoeur, *Vivant jusqu'à la mort. Suivi de Fragments*. Paris, Seuil, 2007: ポール・リクール、『死まで生き生きと—死と復活についての省察と断章』、久米博(訳)、新教出版社、2010年。

文・講演集 (Écrits et Conférences)』<sup>8</sup>。このシリーズは第5巻まで刊行されている。③リクールが出版を意図しなかった、黎明期の思索である修士論文『ラシュリエ、ラニョーの神の問題に適用された反省的方法』(以下『修士論文』)<sup>9</sup>。④シカゴ大時代の秋学期に行われた『想像力講義』<sup>10</sup>。この出版計画は2013年にパリのリクール生誕100年学会で発表され、2024年になってようやく出版された。これは初めての没後出版の講義録である。出版の際に方法的特徴としては、リクールの講義ノートとシカゴ大での教え子であるジョージ・テイラー (George H. Taylor) の講義ノートを批判・検討し、擦り合わせたものである。もともとは1975年の講義の録音をテイラーが清書し、2005年にはリクールのアーカイブ編集・審査委員会にすでに送られていた。その後テイラー、パトリア・ラヴェル (Patricia Lavelle)、ジャン＝リュック・アマリック (Jean-Luc Amarlic) が初期の出版プロジェクトのメンバーとなり、英語版とフランス語版の両方での出版計画が進められた<sup>11</sup>。フランス語版では、1975年のシカゴ講義の下敷きになったパリのパルマンティエ通りで行われた共同セミナーの原稿が編集され付録として掲載された。セミナーはシカゴ講義の前年度である1973年から1974年に行われた。ここでリクールは、カントの読解から構想力における創造的図式、フッサールの読解から哲学的反省における想像力的方法的役割について述べた<sup>12</sup>。

リクール没後のアーカイブ出版は一つのまとまった主題の著作として編者が解説し、それぞれの視点から方向性を示す共同出版プロジェクトであるといえる。これら以外には、論文や講義録、草稿などを個々の研究、もしくは研究プロジェクト主体での活用・研究があげられる。これらの活用・研究動向では、リクールの居住した場所や機関、関わりのあった国の研究者との交流から主著と思索の年代的特徴を論じている。例えば、1920年代から1930年代までのレンヌ時代についてのリクールの回顧講演をジェローム・

---

8. Paul Ricœur, *Écrits et Conférences 1. Autour de la psychanalyse*, Paris Seuil, 2008; *Écrits et Conférences 2, Herméneutique*, Paris, Seuil, 2010; *Écrits et Conférences 3, L'anthropologie philosophique*, Paris, Seuil, 2013; *Politique, économie et société, Ecrits et conférences 4*, Paris, Seuil, 2019; *La Religion pour penser, Écrits et conférence 5*, Paris, Seuil, 2021. その他にリクールの対談集集めた *Philosophie, éthique et politique, Entretien et dialogue*, Paris, Seuil, 2017 がある。

9. Paul Ricœur, *Méthode réflexive appliquée au problème de Dieu chez Lachelier et Lagneau*, (Philosophie et Théologie)[Réédition de Mémoire de master déposé en 1934], Paris, Cerf, 2017.

10. Paul Ricœur, *L'Imagination, Cours sur l'Université de Chicago(1975), suivi de Séminaire de la rue Parmentier(1973-1974)*, Paris, Seuil, 2024; Paul Ricoeur, *Lectures on Imagination* Chicago, The university of Chicago Press, 2024.

11. P. Ricoeur, *L'Imagination, Cours sur l'Université de Chicago(1975)*, op. cit., p. 9.

12. *Ibid.*, p. 401-428.

ポレー (Jérôme Porée) が取り上げ<sup>13</sup>、1948年から1956年までのストラスブール大学在籍時代のものではダニエル・フレイを中心とした研究プロジェクト<sup>14</sup>、1957年からのソルボンヌ大、ナンテール大時代のパリ・プロテスタント神学院講義に言及したオリヴィエ・アベルの研究などがあげられる<sup>15</sup>。

とりわけ、ポレーの研究は、ウエスト・フランス新聞 (*Ouest-France*) のジャーナリストであるジョルジュ・ギトン (Georges Guitton) のレンヌ市の地域文化研究に活用されている<sup>16</sup>。文学的都市としてのレンヌの魅力を描き出すことに主眼を置いている。ギトンはリクールについて一章を割き、彼の「歩くことを学んだ町」というレンヌの印象を評価している。以下にポレーとギトンの研究からリクールの思索とレンヌ市の地域文化事情との関わりを述べる。

## 2004年のリクールの回顧的講演と地域文化研究の接点

ジェローム・ポレーはリクールの教え子の一人であり、レンヌ大学 (旧レンヌ第一大学) 哲学科で教鞭を取ってきた。著作『生きた実存』の「哲学者、建築家、都市」<sup>17</sup>の中で、都市を構成する市民としての他者への配慮のあり方が政治参加や都市計画における建築物のあり方とも関わることが述べられた。政治家と建築家の視点が融合すること

---

13. Jérôme Porée, « Le philosophe, l'architecte et la cité », dans Jérôme Porée, *L'Existence vive*, Strasbourg, Presses Universitaires de Strasbourg, 2017, p. 147-163. リクールの回顧的講演がポレーの研究の参考文献として掲載されている。Paul Ricœur, « Discours de réception de Paul Ricœur à l'Hôtel de Ville de Rennes le 23 avril 2004 » dans J. Porée, *L'Existence vive, op. cit.*, p. 161-162.

14. Daniel Frey (dir.), *La Jeunesse d'une pensée, Paul Ricœur à l'Université de Strasbourg (1948-1956)*, Strasbourg, Presses Universitaires de Strasbourg

15. Olivier Abel, « Le clos et l'ouvert, Ricœur et le Néokantisme de 'l'école de Paris' », *Études Théologiques et Religieuses*, Tome 80, 4, 2005, p. 469-482. この他にベアテ・ベンガルド (Beate BENGARD) のリクールの『トレント講義』を扱ったものがある。これまでイタリア語では翻訳があり、フランス語では縮約版が出版されたものをフランス語で全文掲載し、自身の研究テーマであるリクールとエキュメニズムの射程を論じる際の材料にしている。Beate Bengard, « L'herméneutique œcuménique de Paul Ricœur selon la 'Conférence de Trente' », *ISTINA LXI*, 2016, p. 37-50.

16. Georges Guitton, « Paul Ricœur, marcheur dans la ville », dans *Rennes de Céline à Kundera*, Rennes, Presses Universitaire Rennes, 2016, p. 41-53. フランスに亡命し、レンヌ市に居住経験のあるミラン・クンデラ (Milan Kundera)、大戦中に刑務所に収監されていたエマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Levinas) などの作家や哲学者などの証言と地域文化事情に関わる一次資料とも合わせて調査している。

17. Jérôme Porée, « Le philosophe, l'architecte et la cité », dans J. Porée, *L'Existence vive, op. cit.*, p. 147-163.

で、都市を住むことができる世界へと変えることができる。これに到達するためには、「町の中を歩くこと (marcher dans la ville)」と「人生を歩むこと (marcher dans la vie)」が一つになることが重要と述べる<sup>18</sup>。ポレーは、リクールの回顧的講演をリクールのアーカイブから復元しているが、主題的に論じているわけではない。あくまで資料として掲載し、リクールの「歩くことを学んだ町 (la ville où j'ai appris à marcher)」は「生きることを学んだ町 (la ville où j'ai appris à vivre)」であるという主張を踏襲したものとして活用している<sup>19</sup>。

リクールの回顧的講演では『修士論文』準備期間に教鞭をとったサン・ブリウ市の高校の生徒とバカロレア対策の面談をしたタポール公園の思い出などが述べられている。また人物としてはリクールの高校時代と準備学級時代の哲学教師ロラン・ダルビエ (Roland Dalbiez) との関係が言及されている<sup>20</sup>。

またギトンはポレーの主張とリクールの回顧的講演の内容を踏まえて、リクールのこれまでの対談集からリクールと関係のあった場所を紹介している。列举すると、リクールが姉のアリスと居住していたレンヌ市セヴィニエ大通り 35 番地の祖父母の自宅、通っていたプロテスタント教会やエミール・ゾラ高校、オッシュ広場にある旧レンヌ大学、のちに妻となるシモーヌ・ルジャの親族がタイピストとして働いていたウエスト・エクレール新聞社 (*L'Ouest-Eclair*、現ウエスト・フランス)、散歩したレンヌの北墓地などである。ギトンはリクールの回顧的講演にあるウエスト・エクレール新聞社に通っていた当時の様子を、20 世紀ブルターニュ地方を代表する知識人であるピエール＝ジャケス・エリアス (Pierre-Jakez Hélias) の証言から補足した<sup>21</sup>。当時はスポーツの結果など、その日のニュースはウエスト・エクレール社入り口の掲示板に書かれていた。ウエスト・エクレール社にその日の新聞やニュースを得るために通う経験は、リクールの政治・社会参加の見習い期間として重要だった。リクールはレンヌ市内の地区を歩き、様々なことを体験しつつ思索を形成していったのである。ポレーとギトンの研究は、リクール研究でも言及が少なく、貴重な視点である。リクールの回顧的講演ではあまり述べられていない、リクールの通っていたプロテスタント教会の活動についても地域研究の成果から言及することができる。

プロテスタントの教徒であったリクールは、当時のカトリックの雰囲気にも馴染めず、

18. *Ibid.*, p. 161.

19. P. Ricœur, « Discours de réception de Paul Ricœur à l'Hôtel de Ville de Rennes le 23 avril 2004 » dans J. Porée, *L'Existence vive*, *op. cit.*, p. 162.

20. ダルビエとの関係にかんしては以下を参照。Paul Ricœur, « Mon premier maître en philosophie », dans Marguerite Léna (dir.), *Honneur aux maîtres*, Paris, Critérian, 1991, p. 221–225.

21. ギトンの研究の註を参照。G. Guittou, « Paul Ricœur, marcheur dans la ville », dans *Rennes de Céline à Kundera*, *op. cit.*, p. 51.

自分自身を異端的なものという感覚を抱いていた。自分の「周囲を取り巻く環境 (milieu urbain ambiant)」<sup>22</sup>とは逆に、「世俗的な環境 (milieu laïque)」で多くのことを学んだ。レンヌのプロテスタント教会はボーイスカウト活動を社会参加活動として後押しし、若き日のリクールもこれに参加した。このプロテスタント教会は第一次大戦後は牧師のジョン＝ダヴィッド・ポスト (John-David Bost) とボランティアの信徒によって運営されていた<sup>23</sup>。リクールが通っていたであろう時期の牧師はルイ・バステイド (Louis Bastide) であった。彼は当時の世俗化された社会の状況は宣教のための好機と捉えていた<sup>24</sup>。このようなプロテスタント教会との関わりの中でリクールはレンヌの町中を歩き、「世俗的な環境」との交わりを通して、生き方の一部を形成したといえる。

### レンヌ時代のリクール黎明期の思索の方向性

リクールのアーカイブ活用・研究動向から、レンヌ時代のリクールの思索と地域研究の関わりを示した。最後に哲学史・思想史研究へとその方向性を指摘することができる。

リクール黎明期の『修士論文』は、リクールが旧レンヌ大学時代に、サン・ブリウの高校で教えながら準備したものである。指導教官だったレオン・ブランシュヴィック (Léon Brunschvicg) の哲学史研究の影響を受けていることがわかる<sup>25</sup>。当時のレンヌ大学での指導の経緯なども含めて探る必要がある。ブランシュヴィックとの関係から、ジャ

22. この点是对談集で詳しく述べられている。 *La Critique et la conviction : entretien avec François Azouvi et Marc de Launay*, 2ème éd, Paris, Hachette[1995]2002, p. 19.

23. Jean-Yves Carlier, *Protestants et Bretons*, Carrières-sous-Poissy, La Cause, 1994, p. 266-267. レンヌのプロテスタント教会史はブルターニュ地域研究との関わりで論じられている。

24. Cité sans référence par J.-Y. Carlier, *Protestants et Bretons, op. cit.*, Carrières-sous-Poissy, p. 268. 当時のレンヌにおける政教分離法案の影響については、以下を参照。Johan Theuret(dir.), *Une siècle de laïcité en Bretagne, 1905-2005*, Rennes, Édition Apogée, 2005.

25. 執筆者は、ブランシュヴィックがブルターニュの哲学会に所属しレンヌ大とも関わりがあった旨をリクール文庫で『修士論文』を閲覧の際、カトリーヌ・ゴルデンシュタインから伺った。ブランシュヴィックの哲学史の影響としては、ラシュリエ (Lachelier) とラニョー (Lagneau) の直接の影響関係を扱っている点である。リクール文庫の所蔵文献からレンヌ大在籍時代に所持していたブランシュヴィックの『西洋哲学における意識の進歩』を執筆者は実際に確認している。Léon Brunschvicg, *Le Progrès de la conscience dans la philosophie occidentale*, t. I et t. II, Paris, Félix Alcan, 1927 を参照。ラシュリエとラニョーの扱いは、当時の哲学史研究書であるイザーク・バンルビ (Isaac Benrubi) やドミニック・パロディ (Dominique Parodi) と異なる。以下を参照。Isaac Benrubi, *Les Sources et les courants de la philosophie contemporaine en France*, t. I et t. II, Paris, Félix Alcan, 1933. Dominique Parodi, *La Philosophie contemporaine en France*, Essai de classification des doctrines, Paris, Félix Alcan, 1920.

ン・ナベール (Jean Nabert) とのつながりへと広げることができる<sup>26</sup>。

リクールのアーカイブを活用した研究は、著作の内容を深め、解釈に深みを与えるものであるが、フレイの述べる通り、あくまで「補助的なもの」である。著者の残した遺言として称揚したい誘惑にも駆られるが、あくまで副次的媒体であり、主著の思索に取って代わることはない。それは、アーカイブに書かれた断片的な内容や没後出版の著作は、主著との適切な距離、批判的な視点の確保の難しさにあるといえる。重要なことは、副次的媒体としての身分を遵守しつつ、その全体像を深掘りし、練り上げることである。そのためには、地域文化研究の成果を加味し、吟味する可能性が残されている。今後は哲学史・思想史研究の成果も交えることが課題となる<sup>27</sup>。

やまだ・ともあき  
(南山宗教文化研究所)

---

26. ブランシュヴィックとナベールの哲学とキリスト教信仰をめぐる関係については、以下を参照。Léon Brunschvicg, « La Pensée intuitive chez Descartes et chez les cartésiens », *Revue de métaphysique et de morale*, quarante-quatrième année, 1937, p. 17-20. Jean Nabert, « La Raison et la religion selon Léon Brunschvicg », *Revue de métaphysique et de morale*, quarante-septième année, 1940, p. 85-111.

27. 本研究でのリクール研究の着想は指導教員であるオリヴィエ・アベル、そして何よりもアベルに引き合わせてくれた久米博先生との交流から生まれたものである。20年前近く前にお会いして以来、研究に関する数々のアドバイスやリクールとの思い出など、あたたかい学恩に感謝し、謹んでこの論文を久米先生の御霊前に捧げます。